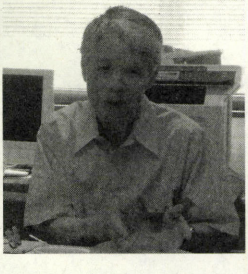
インタビュー

倉橋惣三と私(1)

語り手　森上　史朗
聞き手　浜口　順子
佐治由美子



●倉橋惣三研究を始めたきっかけ

浜口　森上先生は、いまさらご紹介するまでもなく、幼児保育・教育の原理や思想、乳幼児の発達や保育方法などに関する数多くの論文・著作を世に出され、保育や保育者養成の現場に大きな影響を与えてこられました。一方で、保育史という領域のご研究も、先生の主要な業績として忘れることができません。『児童中心主義の保育』（教育出版）、『子供に生きた人・倉橋惣三―その生涯・思想・保育・教育』（フレーベル館）など、貴重な史料を駆使されたご著書がおありです。さて本日は「いま、倉橋と出会う」という特集テーマに沿っていろいろとお話をうかがいたいのですが、そもそも森上先生にとって倉橋惣三との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

森上　私は、昭和六（一九三一）年岡山生まれですが、東京教育大学（現在の筑波大学）に入ると心理学を学びました。卒業して北海道の教育研究所に勤め、障害児の研究をしました。当時は、保育科というのは、いわゆる、いまでいう保育士や幼稚園教諭を養成する所で、東洋英和や聖和などの伝統的な養成施設があるぐらいで、児童学科にしても、お茶の水女子大学（以下、お茶大）や日本女子大学だけだったわけですから、幼児教育だけを専門にやるという人

はあまりいなかった時代です。私が最初に勤めた大妻女子大学で、平井信義先生とご一緒することができました。そうでなかったら、あるいは一生、倉橋に出会わないで終わっていたかもしれません。平井先生がお茶大を辞められて、大妻に児童学科が創設され、学科長として行かれた時ですね。

佐治　それはいつごろでしょうか。

森上　昭和四十（一九六五）年ぐらいですね。世間で幼児教育を教えている先生は教育学や心理学出身の方が多かったですし、アメリカからディシプリンカリキュラムといわれる、いわゆる構造主義のカリキュラムが入ってきて、それに関心が向いていた時代です。その中で倉橋先生の伝統が消えずにずっと続いてきたのは、津守真先生、平井先生、もう一人は坂元彦太郎先生の功績ですね。平井先生は本当に倉橋先生に傾倒されていました。オーストリアの留学から帰られてから、教員同士で「先生」って言うのはやめようなんておっしゃっていたんですね。

浜口　オーストリアの大学ではそういう呼び方をしなかったのでしょうか。

森上　ええ、「〇〇さん」が一般的で、「先生」と言い合うのは日本だけの伝統だからやめようなんてことをおっしゃった。だから僕らが時々「平井先生」とお呼びすると怒られたりしていたんですけれど、平井先生も「倉橋先生」って言うんですよ（笑）。

佐治　そこだけは。

森上　そのことを僕たちが言うと「倉橋先生は別だ」って言われるんです（笑）。平井先生がよく引用されていた『育ての心』『幼稚園真諦』『幼稚園雑草』（フレーベル館）などの倉橋の著書を読むと胸にずしんときました。僕は本当は心理学は途中でやめようと思うくらい嫌いだったんです。それは、当時はどちらかというと実験心理学のようなものが主流でしたので、子どものこととか臨床心理学なんかをやりたいなどと言うと、そんなのは学問じゃないとえらくしかられたりした時代だったものですから。倉橋先生のような、子どもとじかに接してその自分が接した感覚から、子どものこととか保育のことを

語っていこうというのには、本当にびっくりしました。

佐治　それで、倉橋惣三の研究を始めようと？

森上　そうですね。日本保育学会にはかなり前から入っているんですが、当時は保育学会でも倉橋の研究をする人は非常に少なかった。当時、倉橋先生についてのシンポジウムを津守先生が中心になって開かれました。確かその席で、韓国李花女子大学の李相琴さん（保育研究者。日本で学位を取得した）が、「不思議でしょうがないことがある」っておっしゃるんですよ。「あれだけ素晴らしい実績と研究を積まれた倉橋惣三という人の研究がほとんどされていない。研究書が一冊もないということに、本当に私はびっくりする」と。それで、そのころから、私の手に負えるかどうかわからないけれどやってみようと思いました。

　そのころちょうどもう一つ転機がありまして、大妻に五年間いた後、私自身も進んで行く気はなかったんですが、三年でいいと言われ（結局五年いましたが）、文部省（現在の文部科学省）に幼児教育調査官として行くことになりまして、これは大学と違ってある種刑務所のように自由のない大変な場所だと思いましたけれども、そういう中で唯一の救いが、時々坂元彦太郎先生にお会いできることだったんですね。坂元先生は、学校教育法（一九四七年）とか保育要領（一九四八年）とか幼稚園教育要領（一九五六年）とか、そういうものを作っていく過程でどれだけ倉橋先生のアドバイスや考え方の影響を受けたかわからないということでした。坂元先生はいろいろと倉橋先生と接して窓口を開いていかれたということを感じました。

浜口　坂元先生は行政の中にいらして、戦後の幼稚園にかかわる重要な法律や公的文書に、倉橋の思想を反映していったということですね。

森上　学校教育法の第一条で、小・中・高・大学などの学校と並んで幼稚園を「学校」に入れるかどうかが論議になりました。坂元先生はここで幼稚園を「学校」に位置付けないと、幼児教育の専門性を誰も評価しないと主張しておられたんですね。ただ、

保育関係者は「学校」ということに対しては反対が強かった。倉橋先生も最初はやはりあまり賛成ではなかった。けれども、やはり坂元先生とのいろいろのやりとりの中で、「小・中・高・大学及び幼稚園」としての学校とするのだったら、いまは必要かもしれないとおっしゃったとか、そんなことがあったようです。

浜口　「幼稚園」という呼び名は残りました。

森上　ええ。倉橋先生が「幼稚園」という名称は絶対に残してもらわないといけないと。倉橋先生の著書『フレーベル』の中に出てきますね。「園」でないといけない、「幼児学校」ではなくてね。

●いま、倉橋とどう出会うか

浜口　今度は、「いま、倉橋とどう出会う」のかということなのですが、どうお考えになりますか？

森上　倉橋先生の文章の中に「保育における新と真」ということが出てくるものがあります。あれは非常に重要なキーワードになると思っております。新ということは、いまの子どもが置かれている状況を考えて、幼児教育の中での強調点とか、あるいは、変えていかなければならないというようなこともある。しかし倉橋先生は、変わるものの底にあって変わらないトゥルース（真実）があるということを言っていらっしゃる。そういうことは、幼稚園教育要領が作られる過程を見てきても思うことです。幼稚園教育要領といったものを作る時にはある意味では戦いなんですね。われわれの仲間内はいいんですよ。でも、むしろ学校教育に近づけなきゃいけないと思っている人たちが結構いるわけですね。そういう人たちとの戦いなわけです。そういう中でどうしても守っていかなくてはいけない幼児教育の真、ということがある。昭和三十一（一九五六）年の幼稚園教育要領の中でも少しは守られていたが、あの時はどちらかというと学校寄りだった。学校サイドの人たちがリーダーシップを取りましたから。

浜口　最初の教育要領ですね。

森上　次の昭和三十九（一九六四）年の改訂の時は

坂元先生が頑張って変えようとしたけれども、変え切れなかった部分があった。平成元（一九八九）年の改訂の時には、わりあい幼稚園のことがわかる人が多かった。「幼稚園教育の基本」という、第一章総則の中に書いてあることは、言葉は違いますがニュアンスとしては、倉橋が大正五（一九一六）年に「幼児教育の特色」という題目で京阪神連合保育会で講演された内容と、そっくりなんですね。すなわち学校教育とは違う（一）自発的、（二）相互的、（三）具体的・総合的、（四）情緒的という特色、そういうことに気づかれていた。

やはりある意味では、倉橋の考えがいまに続いてきていることですね。情緒的ということに関しては、わりあい批判する人が多いですが、私はそれはすごいことだというふうに思うんです。別の言葉で言えば内面性ということなんですね。

浜口　子どもの内面性に注目するというのは当時としてはとても新しいことだったんでしょうね。一貫してそれが平成元年の教育要領にまで流れている。

森上　ですから基本的な考え方というのは、本当のものを追求していくとそこに到達するわけです。そういうものがあるんだろうなと思うんです。ただし、細かい点になると、どう伝えられていくのか。

倉橋先生の周辺で直接保育をされた人たち、つまりお茶大やその前身の女高師（東京女子高等師範学校）で学んで保育者になられた人たちの美登利会の方々がある意味では倉橋の保育を支えてこられたともいえます。けれども、美登利会だけであったら消えていたんではないかと思います。ある意味ではサロン的というか、そういう形では残っていたかもしれませんが。

いま、保育者養成の中でも倉橋の理論というのは欠かせないものだというふうに位置付けられていますが、こういう形で残ったのは、先ほど挙げた三人の方のお力が大きかったと。私自身、この方々の影響を受けていますし、この方々がいなかったら倉橋惣三の考え方は今日まで伝わってこなかったんではないかと思います。

浜口　理論を実現していく手だてについてはどうでしょうか。どう引き継いでいくのか。

森上　私は「自己充実」というのも非常におもしろい考え方だと思っています。単なる「充実感」ではなくて「自己充実」。これは子ども側の充実ですから、大人から見て充実しているかということではないということ。でも放っておいてはいけないんだということで「充実指導」へ。さらに、「誘導」へということです。ただ、これは津守真先生もお書きになっているんですが、ここに現代に残された課題があると、私もそう思います。いま、倉橋先生が生きておられたら、多分ここはその後の実践に即して書き直されただろうと。ただしこういうモノが出てくる当時の状況を見てみれば、その斬新さにみんなが腰を抜かさんばかりに驚いたというんですから、そういう状況の中で書かれたことに大きな意味がある。

●誘導保育と現代

森上　いま、わりあい学校教育的に考える人たちも、誘導保育というのは協同的な学びに通じると評価していますよね。

浜口　近いものがありますね。

森上　だからある意味ではそちらの方向にのみ向かうという危険性がある。もちろん私はいつも大人が正しいと言いたいのではないけれども、大人は長い間いろいろ経験もし、挫折もし、そこから立ち直ったりもしながらやってきた。それをもとにして世の中にはこんなに素晴らしい絵本があるよとか、こんな楽しいことがあるよということを子どもに提案するとか提示するとか投げかけるとか、そういうことは否定すべきことではないと思うんです。新しい形で誘導とか教導ということを考えていく必要があるのかもしれない。教導についてはほとんど倉橋先生は触れてはいらっしゃらない。

浜口　教導は、主には小学校以上のことですね。

森上　でもあれは『幼稚園真諦』の中に書いていらっしゃるから。短いですけれどね。ですから、そこの誘導とか教導というものを整理して、提案するとか

ね。ただし提案というのは無理やりになってしまう危険性があって問題があります。やはり誘導保育案だけでは詰め切れないところがあるのでしょう。

浜口　時代で大人が変わってきたという面もあるのかと。いまは、大人が主体性を発揮しないほうがよいというような、ある意味、誤解も生まれたりしていますね。一方で、プロジェクトメソッドのように、割と大人がある方向に導いていくような傾向がよしとされることもあるような気がします。

森上　そうですね。倉橋先生は、戦後の『幼稚園真諦』改訂版の中で、巻末に付いていた具体的な「水族館」などの実際指導案を示した部分を削除しています。これはプロジェクト的で単元保育、テーマ保育などに偏っていくという危険性に気づいておられたのではないかと思いますね。

平井先生は倉橋先生の影響で、徹底した現場主義でしたから、大妻では教員も週に最低一日か二日くらいは幼稚園とか保育所とか障害児の施設にべったりと入って子どもとかかわっていました。私も同じ保育所に何年間かずっと通っていましたが、そこで見ていると、やっぱり、表現が嫌いな先生というのは表現にかかわる活動が少ない。やったとしても、子どもが食いついてくるようなのは出てこないとか。長所と短所があるとは思います。運動が得意な人で子どもの気持ちのくめるような人であれば、運動的なことはやるんでしょうけれど。でも、東京都の認証保育所の中には環境が不十分で、ほとんど子どもが身体を動かさない生活をしているような所もあるんですね。そういうようなことがありますから、誘導ということが必要になる。しかし、それは短いスパンのことではないですよということを誘導保育案の中にも書いているんですね。子どもの育ちを長いスパンで見た時にどうしても考えておかなくてはいけないところだと。

浜口　保育者の特性によって、具体的な内容も違うということも踏まえていらした。とすると、新しい問題に立ち向かう時にも真なるものは変わらずあって、それが幼稚園教育要領の中にも脈々と続いてき

たということですね。

森上　僕なんかは研究者として見ているから、倉橋先生をどこかで対象化しているんですね。ところが、倉橋先生と共に生活してきた人は、平井先生もそうですけれども、とても対象化なんかはできないんですね。だから美登利会の人から、先生はよく〝倉橋惣三〟なんて呼び捨てにできますね、なんて言われたことがありました。

そこに私の反省もありますけれど、もう一つの問題があるように思うのです。『子供讃歌』（フレーベル館）の中で倉橋先生自身が、フレーベルやペスタロッチに非常に影響を受けたと言いながら、でも、それを教祖のようにしたり、神格化してはいけない、それらの人に導かれながらもその人を超えていくように努めなくてはならない、先人は方法論とか見方を提示してくれているのに過ぎないということを忘れてはいけませんよ、とかなり強い口調で書いていらっしゃる。坂元先生に言わせると、倉橋先生からじかに教えを受けた人たちには、「師は師たるべく他の存在ではあり得ない」というところがある。しかしその倉橋先生自体が、いまだったら「これはどうなのか」とか、いま問題があるというようなことを考えている。当時としてはとても大事なところだったということを、いまという状況になっていろいろなことが新しい課題として迫ってくるのです。

浜口　それが、いま、森上先生が倉橋先生と出会う時の出会い方なのですね。

森上　津守先生もおっしゃっていますが、これは私たちに残された、現代の保育に携わる者が追求していかなければならない課題であると。いまは研究者の中にも、わりあいに現場の人と一緒になって研究をしていく人が増えてきていますから、単に机の上で研究するのではなくて、倉橋の保育論と現場の実践のかかわりを追求していく必要があるのかなと思います。

（子どもと保育総合研究所代表）

浜口順子・佐治由美子（お茶の水女子大学教員）

記録・金子未希（お茶の水女子大学大学院生）